

# ハッピーな人生はやすらぎのふるさとで

—暮らし続けてわかる良さ、離れてみてわかる良さ

「特徴のないまち」・・・宇都宮の印象を語るとき、決まって聞かれる言葉だ。しかし、暮らしている私たちは無意識に感じているのではないか。“その特徴のなさが宇都宮の良さ”であると。—— 突出したものは少ないが、何でもそれなりに揃っていて、何かしようと思えば何処にでも行きやすい。都市として発展していて、それでいて、やすらげる雰囲気がある。・・・さて、このバランスの良さや暮らしやすさはどこからくるのか。人生のステージとして、住まう場所として、郷土に大切なものは一体何なのだろうか。そんなことを少し考えてみたい。

## 恵まれた自然環境が生み出す心地よさ

宇都宮は栃木県のはば中央。日光、塩原、那須の山々を北に背負い、東には鬼怒川が流れ、南には関東平野の沃野が開ける。気候的には東北型と西南型との境界付近にあり、両方の特性を併せ持つ。また、内陸性のため寒暖の較差が比較的大きいが、それがかえって四季折々の楽しみを与えてもくれている。災害が少ないことも暮らしやすさの重要な要因だ。自然災害の少なさと大規模地震の発生率の低さなど、宇都宮は、未永く心地よく暮らすのに絶好の地なのだ。

## ■震度6弱以上の地震が起こる影響度(可能性)【都道府県庁所在地順位】



※もしその時の備えは忘れなく

## 絶妙な位置がもたらす安定感

東京から100キロ。昔から切っても切り離せない宇都宮の宿命であり、強みでもある。中央の強力な磁場に吸い寄せられることなく、中央を活用することができる。そういった絶妙な距離にあるのだ。

北岳南平の好客の地。宇都宮は、茶やユズ栽培の北限、関東地方におけるリンゴ栽培の南限になるなど、農作物等の北限・南限を併せ持ち、稲作はもとより、豊富な種類の農作物が栽培されている。昨今、知育・徳育・体育の基礎となる「食育」がクローズアップされているが、生きる上での基本である“食”の充実したふるさとを、もっと自慢したい。

北関東の地方中核都市。こうした位置付けが絶妙なバランスを生んでいる。都会的すぎず牧歌的すぎない。だから、商業・工業・農業が高次のバランスを保ち、職も多い。

一方で、潤いある住環境など、都会の持たない良さも併せ持つ。生活の基本となるものが揃っている。このことが暮らしの安定感に繋がっているのだ。

## 交通の要衝都市であることが叶える希望

宇都宮は古くから交通の要衝。東北自動車道や東北新幹線…。近代化で時間距離は縮まった。更に平成24年には北関東自動車道が全線開通を予定。弱かった東西ルートの充実で海も身近なものとなる。海へ山へ街へ、レジャー・ショッピング・学問・ビジネスと、あらゆる希望を叶える一大拠点へ。宇都宮って、やっぱり魅力的!



## 主な農畜産物の生産分布マップ



有効求人倍率 37中核市のうち **2位**

(平成18年12月、ハローワークデータより)

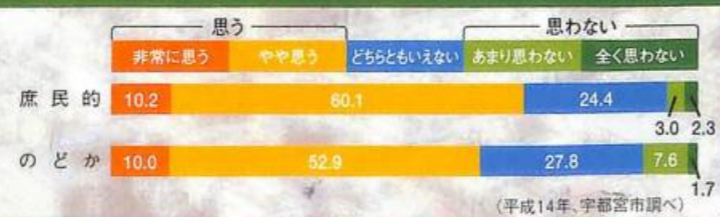
※お米は全地区で生産

## 心根のやさしさが醸し出す安心感

江戸時代には宿場町として、「小江戸」と呼ばれ賑った宇都宮。いわば“陸の港”。こうしたことから、“どこから来た人でも親しく迎える”という気質があるとの声も聞かれる。更に、庶民的で、のどかな雰囲気を醸し出す宮っ子の“心根のやさしさ”。親類や地域に見守られ、子育ても安心してできそうだ。

—— 人の温かさが感じられるまちを育みながら、やすらぎのふるさとでいつまでも暮らしたい。

## ■宇都宮市に対するイメージ (50%以上が「思う」と回答したものを抜粋)



宇都宮市制110周年記念

# わがいとしのふるさと 宇都宮



～昔と今がここでシンクロする～

元気なまちにはワケがある!  
ときめきいっぱい宇都宮

110周年  
2006 110th Anniversary





# 歴史あるまちに生まれて、よかった

「宇都宮市は、恵まれた自然と古い歴史に支えられ…」これは、宇都宮市民憲章前文の書き出しである。私たちのふるさと宇都宮は、北岳南平の絶好な位置にあり、古くから交通の要衝として歴史や人・モノ・情報が行き交うまち。だから古くから歴史を刻み発展し続けてきた。こんな歴史あるまちに生まれて、よかった。

## うつのみやが歩んだ「10」の足跡

私たちのふるさと宇都宮は、明治29年に市制を施行し、古い歴史や豊かな自然、そして、先人達のためまめ努力に支えられ、平成18年4月1日に市制110周年を迎えました。そこで、1年間、この記念の年を市民の皆様とともに祝い、また、歴史や伝統文化などの本市の魅力や再発見・再認識しながら、本市が将来にわたって持続的に発展できる魅力と活力あるまちづくりに、改めて地域をあげて取り組むきっかけにしていこうと考え、記念事業に取り組んでまいりました。

このパンフレットは、こうした事業の一環として、かけがえないふるさとである私たちのまち「うつのみや」のすばらしさに改めてふれ、これからのまちづくりに一緒に取り組んでいただく一つのきっかけになれば、という思いで作成いたしました。

このパンフレットを見開きながら、ご家族やご友人など皆様で、ふるさと談義に花を咲かせていただき、これからの10年、そして未来の宇都宮に想いを廻らせていただければ誠に幸いです。

平成19年3月

宇都宮市制110周年記念事業  
実行委員会会長(宇都宮市長)  
佐藤 栄一

### I 【宇都宮氏の時代】

平安時代後期、朝廷と対立する安倍頼時を追討するよう、当時の源氏の棟梁、陸奥守の源頼義に命が下る。これに端を発する争乱が、前九年の役である。この時、源頼義に従って宇都宮にやって来たのが、宇都宮氏の祖とされる藤原宗円。…これを契機にいよいよ宇都宮氏の時代が幕を開ける。

### 宇都宮歌壇の繁栄

5代城主宇都宮頼綱は、出家して「蓮生」と名のり、地方和歌活動の集団、「宇都宮歌壇」の基礎を築いた。宇都宮歌壇は、京・鎌倉とともに「日本三大歌壇」と呼ばれるほど繁栄した。

### II 【宇都宮氏最後の城主……国綱】

22代城主宇都宮国綱は、豊臣秀吉に従い数々の武功を重ね、一門格を表す「羽柴」の姓を贈られるなど信頼を得ていたが、突如改易され、宇都宮氏の時代に終わりを告げる。

### III 【伝説の城主……本多正純】

本多正純は、徳川家康の7回忌に間に合わせるため、急ピッチで宇都宮城の大改築と城下町の整備を断行した。しかし、正純は、突如宇都宮城を取り上げられてしまう。こうした出来事がさまざまな憶測を呼び、「釣天井伝説」を誕生させたのだ。

### 浄瑠璃坂の仇討ち

赤穂浪士の仇討ちの手本になった浄瑠璃坂の仇討ちは、宇都宮藩ゆかりの出来事だった。——宇都宮藩家老、奥平正輝の子・正武(11才)は、父の仇を討とうと藩より暇をもらい、一族42名と芳賀の山奥に隠れ住み、逃げ回る父の仇、奥平守世を5年間探し続けた。そして、遂に江戸市ヶ谷の浄瑠璃坂で仇を討ち、恨みを果たした。「師走の風物詩」の座は忠臣蔵に譲ったが、江戸の美談も宇都宮発だった。

### IV 【戊辰戦争と宇都宮】

宇都宮藩は、新政府側についたため、大鳥圭介、土方歳三率いる旧幕府軍の攻撃を受け落城した。その後、新政府軍の救援により城を奪回している。

### 明治の幕開けとともにあらわれる近代のまじりの姿



開業当時の宇都宮停車場前の風景

### V 【宇都宮の近代化を後押しした県令三島通庸】

明治新政府が国内の近代化・集権化を図るなか、道路網の整備は、中央と地方を結び、人道から車道への転換を図るうえで、特に重要な意味を持っていた。栃木県令に就任した三島は、手腕を発揮し、宇都宮の近代化に貢献する。

### VI 【宇都宮市の誕生】

1896(明治29)年4月1日、人口35,234人、戸数6,991戸の宇都宮市が誕生した。



当時の宇都宮市役所庁舎

### 生活基盤の整備が進む大正時代



大正時代の二荒山神社前大通り

### 浅草にひけをとらぬにぎわいをみせるバンパ…昭和初期



バンパの改築(仲見世風景)

### VII 【戦災からの復興】

戦後の膨れ上がった失業者、猛烈なインフレ、危機的な食糧難のなか、宇都宮にとっての最大の課題は戦災復興だった。市がまず優先して行ったのは清掃、金属回収、水道施設の復旧、住宅対策の4事業。また、学校の復旧も急がれた。

### VIII 【昭和の大合併】

戦後、宇都宮市は数回にわたって隣接地域を部分的に編入してきたが、1953(昭和28)年に施行された「町村合併促進法」により、合併が一気に加速。宇都宮も11町村との合併により、ほぼ現在の宇都宮市域を形成した。その後日本経済は、昭和30年代後半から「所得倍増」の掛け声のもと、かつてない高度成長期に突入。躍進する経済は、物質的な豊かさをもたらしつつ、市民の生活環境を一変させていった。

### IX 【中核市への移行】

政治・経済・文化などあらゆる社会構造が大変革を遂げ、昭和が1989年に幕を閉じ、平成へと時代が変わった。宇都宮市でも、この間、都市化・高齢化・国際化・情報化などの新しい波に対応したまちづくりが進められ、市制100周年の記念すべき年には、よりきめ細かな行政を実施すべく、中核市へ移行した。

### X 【21世紀を迎えて…市制110周年】

「モノ」の豊かさを優先して追求してきた20世紀のまちづくりから、「心」の豊かさを求める21世紀型のまちづくりへの転換、また、少子高齢社会・人口減少時代にも負けない発展し続ける都市づくりが必要となっている。このようななか、宇都宮市は、圏域全体の更なる発展を図るため、3月31日、上河内町・河内町との合併により、人口50万の都市に飛躍する。

時代	年	出来事
平安時代	1056(天喜4)年頃	初代宇都宮城主藤原宗円が二荒山神社の社務職となる
	1235(嘉祥元年)	藤原定家が蓮生(宇都宮頼綱)の山荘に和歌色紙を贈る(この時まじりとめられたものが元になり、小倉百人一首がでる)
室町時代	1558(永祿元年)	宇都宮広綱が下野国(栃木県)に攻め込んできた上杉謙信と多功(上三川町)で戦う
	1578(天正6)年	宇都宮国綱が下野国(栃木県)に攻め込んできた武田勝頼と全崎原(西方町)で戦う
安土桃山時代	1585(天正13)年	北条氏直が宇都宮を攻め、城下に放火する
	1590(天正18)年	豊臣秀吉、宇都宮城に滞在し、「宇都宮仕置」を行い、関東・東北の大名の配置などを決める。その際、徳川家康、伊達政宗らが宇都宮城で秀吉に面会する
江戸時代	1592(文禄元年)	宇都宮国綱が秀吉の命により朝鮮に出兵する
	1597(慶長2)年	宇都宮国綱が追放され、豊臣政権の五奉行の一人、浅野長政が宇都宮城となる
TOPIC	1600(慶長5)年	徳川秀忠、会津上杉氏攻めのため宇都宮城に在陣。中山道経由で関が原に向かう
	1619(元和5)年	本多正純が28代城主となり城下を整備する
TOPIC	1622(元和8)年	2代将軍徳川秀忠の日光社参
	1668(寛文8)年	本多正純が改易される。今泉の興禅寺で奥平正輝と奥平守雄が抗争。正輝が死去する(浄瑠璃坂の仇討ちの原因)
TOPIC	1728(享保13)年	8代将軍徳川吉宗、日光社参の途中、宇都宮城に宿泊する
	1815(文化12)年	宇都宮藩、藩校「潔身館」(後の修道館)を設置する
TOPIC	1868(慶応4)年	戊辰戦争、土方歳三が宇都宮城を攻め、城下町が広範囲に焼失する
	1896(明治29)年	宇都宮市制が施行される
明治時代	1899(明治32)年	市内に初めて電灯がつく
	1896(明治29)年	宇都宮市制が施行される
明治時代	1871(明治4)年	廃藩置県により、宇都宮県が誕生する
	1872(明治5)年	宇都宮、東京間に乗合馬車が開通する
明治時代	1873(明治6)年	学制が公布され藩校の修道館が廃止となる
	1883(明治16)年	宇都宮県が栃木県と合併する
明治時代	1884(明治17)年	三島通庸が栃木県令に就任する
	1885(明治18)年	栃木県庁が栃木から宇都宮に移転する
明治時代	1889(明治22)年	東北本線大宮・宇都宮間が開通する
	1899(明治32)年	宇都宮市制が施行される
大正時代	1906(明治39)年	市内に電話が開通する
	1907(明治40)年	陸軍第14師団が置かれる
大正時代	1916(大正5)年	市内で水道の給水を開始する
	1917(大正6)年	市内バスが運行される
昭和時代	1931(昭和6)年	東武鉄道宇都宮線が開通する
	1945(昭和20)年	7月12日夜、B29により空襲をうけ、市街地の大半を焼失する
昭和時代	1947(昭和22)年	「オリオン通り」が誕生する
	1954(昭和29)年	平石・清原・横川・瑞穂野・城山・豊郷・国本・富屋・後井の9村を合併する
昭和時代	1955(昭和30)年	省宮町・姿川村を合併して、ほぼ現在の宇都宮市域を形成する
	1956(昭和31)年	市制60周年。「宇都宮の歌」がつくられる
昭和時代	1972(昭和47)年	東北自動車道宇都宮・岩間が開通する
	1980(昭和55)年	新4号国道(小山・宇都宮間)が開通する
昭和時代	1982(昭和57)年	栃の葉国体が開催される
	1982(昭和57)年	東北新幹線(大宮・盛岡間)が開通する
平成時代	1996(平成8)年	市制100周年を迎える
	1996(平成8)年	中核市になる
平成時代	1997(平成9)年	農林公園(ろまんちっく村)がオープンする
	2000(平成12)年	宇都宮美術館が開館する
平成時代	2003(平成15)年	シンボルロードが完成する
	2006(平成18)年	全国都市緑化とちぎフェアが開催される
平成時代	2007(平成19)年	市内37地区で「地域まちづくり組織」が設置される
	2007(平成19)年	市制110周年を迎える
平成時代	2007(平成19)年	3月25日、宇都宮城址公園がオープン
	2007(平成19)年	3月31日、上河内町・河内町との合併により人口50万の都市へ飛躍

## うつのみやの略歴

# ふるさとを想い、ふるさとを歌おう

宇都宮の歌は、宇都宮市制60周年を記念して制作された市の歌。半世紀もの間歌い継がれてきている。作曲は国民栄誉賞受賞者の古賀政男、作詞は西城八十という豪華コンビ。今の音楽界でいうなら・・・ちょっと思いつかないほどだ。

——この歌には、宇都宮の誇りや魅力、明日への希望など、ふるさとの過去・現在・未来がぎっしりと込められている。“ふるさとの都”への愛情を確かめながら、いつまでも大切に歌い継いでいきたい。

## 宇都宮の歌

西城八十作詞  
古賀政男作曲



- 宇都宮の歌**  
西城八十作詞 古賀政男作曲
- 一、関東平野の夜明けの風を  
銀杏並木にあかるくうけて  
そびえたつ都 栄えゆく都  
宇都宮 宇都宮  
山青く 水清し  
宮 宇都宮
  - 二、二荒の社の石階に  
母と眺めし馬場のネオン  
なつかしの都 ふるさとの都  
宇都宮 宇都宮  
夢いとし 歌たのし  
宮 宇都宮
  - 三、八幡山にかがやく桜  
石の大谷にこたます植も  
ほがらかの都 進みゆく都  
宇都宮 宇都宮  
結ぶ手に 湧く平和  
宮 宇都宮
- あ、若人の意気燃ゆる街

JASRAC 出 0702102-701



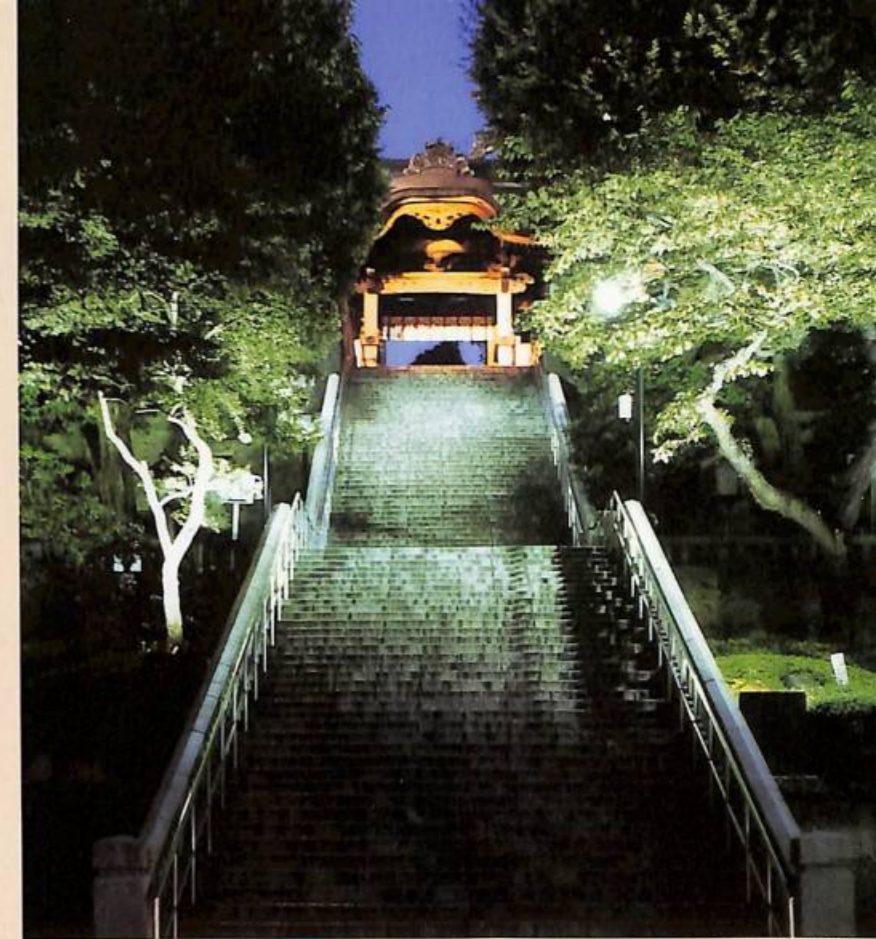
## 大和朝廷の最前線の地宇都宮

宇都宮の歴史は古く、第10代崇神天皇の第一皇子、豊城入彦命が、蝦夷平定のため、この地に足を踏み入れ、一帯を統治したのがはじまりといわれる。

二荒山神社は、古くは宇都宮大明神と呼ばれ、その起源は、第16代仁徳天皇の時代(5世紀頃)、下毛野国造、奈良別王が、先祖にあたる豊城入彦命を主祭人として祀り、国社となったことにさかのぼるとされる。

天慶2(939)年、下野押領使として平将門を滅ぼした藤原秀郷も、入国してまず宇都宮大明神に参拝。平将門追討を祈願したとされる。

大和朝廷の時代、宇都宮は、朝廷の力が及ぶ最前線であり、北関東から東北地方を統治するための拠点として、重要な地であったことがうかがい知れる。



現在の二荒山神社

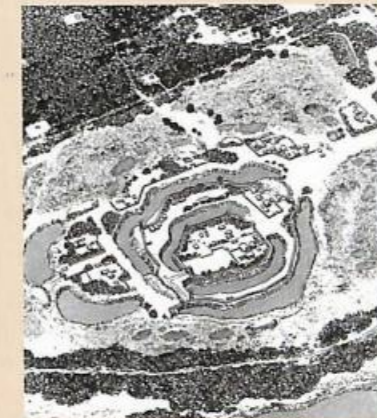
## 宇都宮氏と宇都宮市

### ■名門宇都宮氏の祖、藤原宗円

平安時代後期、朝廷と対立する安倍頼時を追討するよう、陸奥国鎮守府将軍、源頼義に命が下る。これに端を発する争乱が、前九年の役(1051年～1062年)である。

源頼義は、奥州征討に際して宇都宮に入り、豊城入彦命を祀る宇都宮大明神に戦勝を祈願した。この源頼義に従って京都からやってきたのが、後に22代にわたり、宇都宮を統治した「宇都宮氏」の祖とされる藤原宗円であると言われている。宗円は氏家の勝山に庵を組み100日に渡る戦勝祈禱をこらし、その功績で宇都宮大明神の社務職になったと伝えられている。その際、高田邑(現在の宇都宮城址公園付近)に居所を定めたことが宇都宮城の起りであるともいう。

宗円は、源氏勝利の恩賞として、宇都宮大明神の神領の支配を任せられ(当時は祭政一致の政治が行われていた)、才覚を発揮し、領土を広げていく。



中世の宇都宮城の想像図

### ■“うつのみや”の由来

宇都宮の地名の由来には諸説あるが、現在の二荒山神社が下野一の宮であったことから、これが転化して、宇都宮大明神と呼ばれ、鎌倉時代の頃から、周辺地域をさす地名になったという考えが主流である。このように、祭政が密接な関係を持っていた時代、宇都宮大明神を中心に歴史が形づくられ、その後、政治の拠点となる宇都宮城へと歴史の舞台は移っていく。

# 宇都宮のルーツを求めて —宇都宮大明神～宇都宮城

## その後の宇都宮氏—栄枯盛衰

### ■武名とどろく南北朝時代

宇都宮氏は、宇都宮城を代々の居城として用い、3代城主宇都宮朝綱が、源頼朝による奥州藤原氏の征討に従って以来、鎌倉幕府の有力御家人として、下野にその勢力を誇った。特に南北朝時代には、9代城主宇都宮公綱が、新田義貞や足利氏に従って活躍、武将楠木正成をして「宇都宮は坂東一の弓矢取りなり…」といわせるなど、宇都宮氏の武名は全国に広まっていく。

しかし、天授6・康暦2(1380)年、領地境目争いに端を発した茂原合戦において、小山義政に11代城主基綱が敗れて討ち死にした頃から、宇都宮氏は内憂外患の時代を迎える。

やがて戦国末期になると、上杉氏や北条氏がたびたび下野国内に攻め込み、一方では芳賀氏や壬生氏などの有力家臣団が離合集散を繰り返すようになった。こうした状況に対応するため、宇都宮氏は、多気山に築いた山城を合戦の際の拠点にするようになっていた。

### ■時代に翻弄された悲劇の終末

小田原攻めなど数々の武功を重ねた22代城主国綱は、豊臣秀吉から「羽柴」の称号を与えられるほど信頼され、北条氏の滅亡により、戦国時代を乗り切った。しかし、慶長2(1597)年、宇都宮氏は突如改易(取り潰し)になる。それは、宇都宮氏の跡目問題が、浅野長政など豊臣家臣団との対立に巻き込まれた結果であった。国綱は、豊臣から徳川へと政権が移っていくなか復権を果たせず、宇都宮氏の時代は終わりを告げる。

国綱は、供人も許されず、一人寂しく遠く岡山へ流浪の旅に出る。汚名を着せられ追放された城主の悲劇を知り、城下の人々はみな嘆き悲しみ、ただむせび泣いていたという。

# まちづくりと歴史・ひと

市民生活の基盤となるまちづくり。城の守りや交通や、経済成長や…。時代とともに変化してきたまちの姿。——時には歴史を振り返りながら、次世代へ引き継ぐべきまちの姿を考えてみたい。

## 名君 本多正純の宇都宮大改造

正純は、徳川幕府創設期の重臣。大阪城の外堀・内堀を埋めさせて豊臣氏を滅亡に追い込むなど、戦略にも長けたいわば“家康の懐刀”。

正純は、元和5(1619)年、宇都宮城主になると、関東の喉首の要地として、道路網の整備に取り組み、街道の移動により、奥州街道と日光街道が分岐する「追分の地」、交通拠点としての宇都宮を誕生させた。また、日光東照宮へ将軍が参詣する際の宿城として、宇都宮城の大改造に取り組み、城の範囲を拡張し櫓や門を築造。それは、寺院を砦としたり、街道を屈折させるなど、計画的な要塞都市づくりであり、中世以来の町並みを巧みに活用しながら、「関東七城」の一つに数えられる近世の名城として確立させた。



正純の大改造による城下町の変化

現在の町並みの基本形は、この時つくられたといわれている。

また、正純が元和8(1622)年、突如、改易されたことから「釣天井」の伝説も生まれた。

また、正純が元和8(1622)年、突如、改易されたことから「釣天井」の伝説も生まれた。

## 近代化の幕明け「戊辰戦争」 ——“宇都宮城炎上”

慶応4(1868)年に勃発した戊辰戦争で、新政府軍についた宇都宮藩に対し、土方歳三率いる旧幕府軍が同年4月19日に宇都宮城を攻撃、城の弱点とされた南東から攻め入り、城を落とし占拠した。奥州への守りを意識し、北や西に手厚い備えをしており、南東は田川を渡河すれば比較的手薄だったという。戦いに敗れた宇都宮方が城を逃れるとき、敵軍に城を利用されまいと自ら火を放ったことで、二の丸御殿をはじめ、多くの建物が焼失してしまった。しかし、間もなく新政府軍は巻き返し、同23日には逆に旧幕府軍の守る城を攻撃、これを撃退して城を奪還した。

この時、土方は松が峰門のあたりで足に銃弾を受け負傷。会津で約3ヶ月間の療養生活を余儀なくされる。土方は復帰後、会津の防戦に尽力し、その後、江戸城の無血開城を不服とした榎本武揚らと蝦夷地に向かうが、新政府軍の函館総攻撃で没する。

——そして、旧幕府軍は降伏。日本は近代的な中央集権国家への道を歩んでいく。



戊辰戦争 二荒山神社前の動き

戊辰戦争 安塚の戦い  
宇都宮での攻防戦に先立って行われた。新政府軍は安塚に、旧幕府軍は藪田に陣をはり、姿川を挟んで激戦が繰り広げられた。



## 土木県令三島通庸、 近代宇都宮の発展の基盤を築く

薩摩藩出身の三島は、明治16(1883)年、栃木県令に就任。各地での強引な事業推進から鬼県令といわれた人物である。

三島は、明治17(1884)年、県庁を栃木から宇都宮に移転させるとともに、幹線道路としての陸羽街道(現国道4号)の整備を断行。宇都宮においても、道幅四間(7m強)の直線的な幹線道路が誕生した。

三島の圧政は、県令暗殺を謀った加波山事件を引き起こすほどであったが、その政策には、鬼怒川の氾濫による橋りょうの流失を避けるため、宇都宮一氏家間を新規開削するなど、さすが土木県令というべき“先見の明”が散りばめられていたという。

## 戦後復興とたくましい市民

昭和20(1945)年7月12日。「宇都宮もそろそろ狙われるぞ」という噂のなか、市民は避難の備えを本格化する矢先のことであった。朝から降り続いた雨は夜になると更に強くなり、「この雨では…」と警戒を解いていた市民も多いなか、深夜、米軍の爆撃機B29(115機)の来襲を受けてしまう。大都市住民の疎開先に追い打ちをかけ、戦意喪失を図るため、軍需産業の集結した宇都宮が狙われたのだ。逃げ惑う市民の頭上に12,704個、約803トンもの焼夷弾が投下された。実に全焼失戸数8,588戸、死者620名以上、負傷者1,128名以上で、市域の約50%が焼失するという甚大な被害であった。

戦後、民主主義が推し進められ地方自治が芽吹いていくが、市民の生活は苦しく、食糧不足やインフレ、自然災害などが次々と暮らしを直撃。しかし、市民の逆境にくじけないたくましさや、たゆまぬ努力により、こうした危機を打開。市街地区画整理事業や道路網の整備など、戦災からの復興が進められ、宇都宮は、全国的にもいち早い復興を成し遂げていく。



いち早く復興したパンバ仲見世

## 共につくる平成のまちづくり—持続的に発展・繁栄する都市へ

戦後の宇都宮は、30年代半ばに始まる高度成長期に、工業団地造成事業に成功するなど、県都として着実に発展し、高次の都市機能を備えた北関東の中核都市へと飛躍していった。

そして今、少子・高齢化の急速な進行や人口減少時代を見据え、将来にわたって持続的に発展できる魅力と活力あるまちづくりを進めるため、宇都宮市の持つ地域特性や資源を最大限に生かすことができる、「人」や「もの」を大切にすることをもち、自立した人間として力強く生きていくための総合的な力である「人間力」の高い人材の育成、そして、安全性・快適性などの住みよさ、文化・風格などの魅力、豊かさ、美しさ、楽しさなどを総合した力、いわゆる「都市力」を更に高めていくことが大切になっている。

—— 私たちに最も身近でかけがえのない存在である「家族」や、「友達・隣人」との絆、私たちの生活や活動の舞台となる「地域」との絆。こうした絆を育みながら、市民・地域・企業・行政が一体となって、それぞれの力を発揮しながら、市民自治や市民協働の息づくまちをつくりていきたい。



将来のJR宇都宮駅東口・駅前広場(イメージ)

(主な参考文献)  
『図説 栃木県の歴史』阿部昭・永村眞  
『とちぎの歴史街道』栃木県立博物館



### みどりに癒され、

八幡山は、中腹に祀られる八幡宮がその名の由来。八幡山公園は、昭和2(1927)年に市で最初の公園として開園した。戦時中、宇都宮への空襲と本土決戦に備え徹底抗戦するため、地下司令部化が計

画され、今も掘削跡の地下壕がある。ひょうたん池の近くの入口から内部の様子をのぞきながら、平和について考える貴重な場所だ。

八幡山公園は、都心部にある貴重な緑の空間。市民の憩いの場。花見、展望塔、アドベンチャーU、ゴーカート、小動物園…。昔も今も市民の思い出の場所であり、家族の絆を深めるオアシスである。

### 深めよう絆を

城山地区にある古賀志山は、標高582.8メートル。宇都宮で最も高い山である。関東でも屈指の岩登りのゲレンデとして有名で、なおかつ、家族連れのハイキングから上級者まで、多様な登山コースが楽しめる場所でもある。

身近にある本格的な自然。趣味と健康づくりを兼ねて、また、子どもの成長に合せ何度でも訪れたい。共に汗をかき、見事な眺望やかけがえのない思い出を共有できるのではないかな。



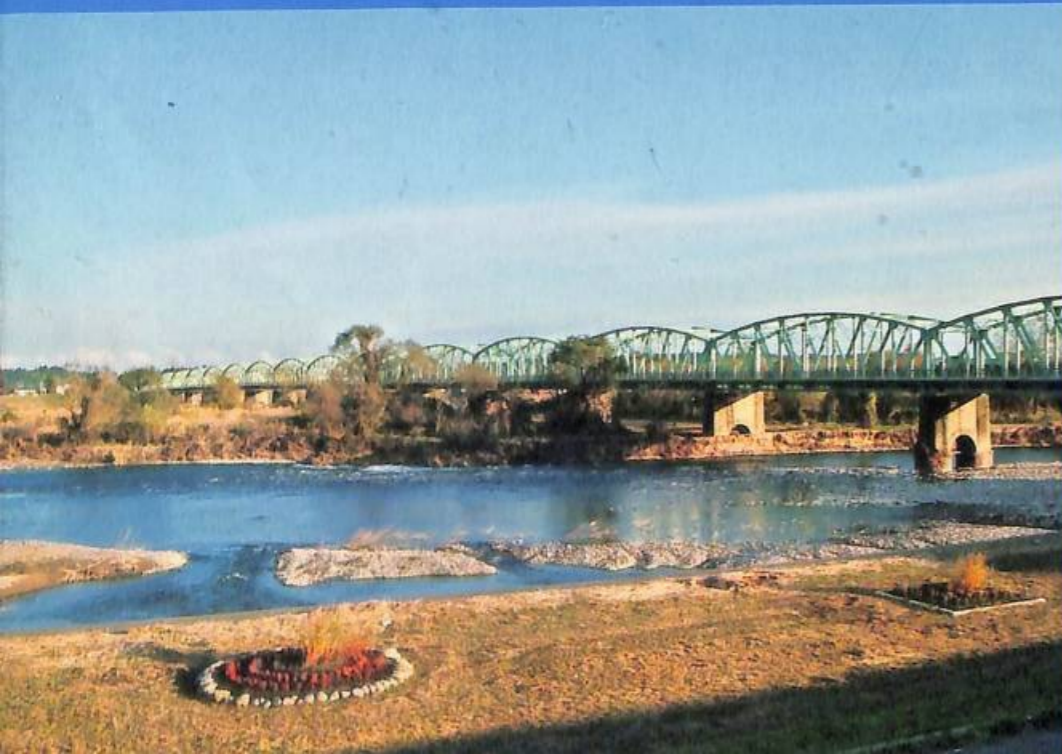
## みどりとみずくに 育まれるふるさと

### 市民生活を支え続けて

近世、下野国を流れる主な河川には各種の船が行き交い、沿岸には河岸が発展した。物資の重要な輸送路、物流の大動脈として大いに利用されたのである。下野最大の河川である鬼怒川は、早くから領主たちによって筏流しが行われた。慶長・元和年間(1594-1624)には、宇都宮藩が城下整備と江戸藩邸建設のため、用材を伐り出し

ている。このように領主によって始められた筏流しは、江戸中期になると農間余業の一つとして、百姓の持林からも盛んに行われるようになった。清原地区では、当時板戸河岸で働く船頭たちに愛唱された、鬼怒の船頭唄の全国大会が毎年開かれている。

水運は、鉄道の開通によって役割を終え、大正期に姿を消していくが、鬼怒川は今も市民に愛され、鮎を求める太公望や河川敷でスポーツに汗を流す団体など、市民のレジャーや憩いの場。そして、水道水の主要な供給源ともなっている。



### きたふるさとの清流

田川は日光を源流とし、宇都宮市街地を南流。市外で鬼怒川に合流する。富士見が丘団地の東の入口に架かる橋の名は「鎌倉橋」といい、近くには、かつて「鎌倉坂」といわれた場所があった。源頼朝が奥州に向かう途中、この坂で一休みをし、手にした桜のムチをさしたら、根が付き大木になったという伝説をもつ。宮の橋の一つ上流に架かる橋は「幸橋」。明治天皇がご巡幸の折り渡られ、それにちなみ改名した。そして、市街地を循環するバスの名は「きぶな」。黄鮎は代表的な郷土玩具である。…昔、天然痘が流行したとき、田川で釣った黄色い鮎を病人が食べたところ、病気が治ったという言い伝えがある。

こんな様々な“いわれ”を持つふるさとの川。市民に親しまれてきた様子が分かる。今もなお愛され続ける田川。市民団体の手によるコスモスの咲くサイクリングロードがきれいだ。田川の清流を取り戻し、街の活性化を図ろうと、宮まつりに合わせ、屋形船も浮かべられるようになった。

——ふるさとの清流は、その姿や役割を変えながらも、時代を越え、今も私たちの生活を支えながら流れ続けている。いつまでも清らかな流れを守っていきたい。



# 石が織りなす 美しき世界

“奇岩群” その呼び名に似合わない、  
何とも美しく幻想的な景色

石のまち大谷には、自然が創り出した奇岩群と、人々が造り出した採石場が点在している。その岩山を縫うように河川と小路がめぐり、開けたところには水田が広がっている。これらの自然美と人工美が調和した景観は、独特の世界を醸し出し、古くから多くの人々に賞賛されてきた。

大谷には、他にも自然の洞窟の壁面に刻まれ、国指定特別史跡・重要文化財である大谷寺の「大谷観音」、自然の岩壁に彫られた高さ27mの「平和観音」、平成18(2006)年に指定された名勝「大谷の奇岩群」、約2万㎡もの巨大空間を有する地下採石場跡が圧巻の「大谷資料館」など、誇るべき資源がたくさん存在している。

——「年齢を重ねるとますます大谷のすばらしさが分かる」というあるご婦人。そうだ、大谷に行こう。また新しい感動があるかも知れない。



大谷景観公園から見た名勝「御止山」



ポケットパークの球形モニュメント

## 大谷石が醸し出す 格調・デザイン —帝国ホテル日本館

いわゆる“帝国ホテル・ライト館”。大谷石が用いられたことで全国的に有名な建造物の一つである。設計を手がけたフランク・ロイド・ライト(1867年—1959年)は、アメリカの代表的な建築家で近代建築の三巨匠の一人でもある。ライトは、帝国ホテルの設計にあたり、石とレンガを用いたとの意向により、全国の石の中から大谷石を選択。西洋と東洋、古代と現代が融合したまったく新しい芸術的な建築を生み出そうと全力を注いだ。

大正12(1923)年にライト館は完成。ところが、落成披露宴が予定されていた9月1日に関東大震災が起きた。だがライト館は比較的軽い被害で済んだため、大谷石の知名度が上がり、需要を伸ばしたというエピソードもある。

複雑な事情から、わずか44年でライト館は取り壊しとなったが、現在も愛知県大山市の「明治村」で、移築・改修された正面玄関部分を見ることが出来る。

また、市内でも、大谷実行委員会「プロジェクト008」が、ライト館正面玄関前にあった球形モニュメントを復元し、大谷景観公園から国道293号に向かう市道沿いのポケットパークに設置。大谷石とライトのコラボレーションを身近に楽しむことができる。



帝国ホテル日本館(帝国ホテル提供)



昭和30年代の  
ネオンまたたくオリオン通り

## ふるさとの作家が描く一つのノスタルジー

宇都宮出身の作家立松和平氏は、著書のなかで幼少期の思い出を次のように書き綴っている。

「バンパのオムライス」(抜粋)……子供の頃の私には、オムライスが何よりのご馳走であった。私の父は宇都宮市内の中心部にあった電気工事会社に勤め、母は郊外の新興の町で食料品店をやっていた。日曜日でも父は仕事にでかけていき、母は客がくるのだからと店を閉めなかった。休みなして懸命に働いていたのだ。世の中全体がそんなふうで、私の両親が特別というのではない。

それでも年に一度ぐらい、盆と正月には両親の気が合って、街に遊びにいった。そうだ、「街」という言



小さな浅草〜バンパの映画館街  
(読売新聞社提供)

## 郷愁の宇都宮 〜そして新しきよきふるさとへ

い方をしたのだった。

宇都宮の繁華街とは、バンパのことである。二荒山神社の前の馬場町あたりのことで、(中略)二荒山神社に向かって参道をなし、仲見世が出来ていた。浅草の仲見世と同じで、小売店がハーモニカのように連なっている。内部は衣料品やおもちゃや金魚すくいなどがあり、外側は飲食店になっていた。(中略)

子供の私の最大の楽しみは、映画を観ることであった。(中略)映画を観終ると、待ち合わせ場所を決めて落ち合い、それから一家四人で食堂にはいった。その時食べるのが、オムライスかライスカレーかハヤシライスだったのだ。ことにオムライスを忙い母はつくってくれなかったから、何よりのご馳走だった。卵の薄皮をスプーンで破り、なかのチキンライスを少しずつ掘って食べる。あまりにもおいしいので、一気に食べてしまうのはもったいないのであった……

——今に生きる子どもたちは、どのようなふるさとの思い出をその胸に刻むのだろうか。すべての営みの礎となるこのふるさとで、家族や仲間などの絆を育みながら、人生の糧をより多く得られるよう、古きよき宇都宮を振り返りつつ、新しきよきふるさとをつくっていきたい。

立松和平著・東京書籍(株)発行「いのちの食紀行」  
(平成11(1999)年)より

現在のオリオン通り

